

*** 口径 20cm の対物プリズムを発見**

旧図書館の移動書架を漁っていたら、古い木箱に入ったかなり重いものを見つけた。木箱(写真1)は36(縦) x 36(横) x 22(高さ) cmの大きさで、古い緩衝材が周囲に嚴重に詰められた(写真2) レンズ枠の様なもの(写真3)が見えた。



写真1 木箱



写真2 緩衝材

木箱の緩衝材をどかせていくと、レンズ枠の様なものの上に白い厚紙の蓋が見えてきた(写真3)。ここまで見て、きっとブラッシャー天体写真儀の対物レンズを発見したと心が躍った。国立科学博物館から里帰りしているブラッシャー天体写真儀の対物レンズが行方不明で、ブラッシャー天体写真儀が国立科学博物館に渡った際、その行方の探索を依頼された香西洋樹氏も見つけられずにいたものが見つかったと小躍りしたのである。



写真3 木箱の中に見えたレンズ枠

厚紙の蓋にはメモが記されていた。そのメモなどについては後でふれよう。レンズ枠にはレンズ状のものが入っていた。しかし、それはレンズではなくプリズムであった。口径 20cm の対物プリズム (写真 4) と思われた。



写真 4 木箱から出てきた口径 20cm の対物プリズム

この対物プリズムには国立天文台の備品番号 (ろ-01-T-82) がついている。この番号からなにがしかの情報は得られるであろう。事務部の資産管理係に問い合わせをしたところ、1988 年 7 月 1 日の国立天文台発足時に東京大学から移管された、恒星用 8 インチオブゼクチャープリズムで「ろ-3」であることまでわかった。確かに No.3 と書かれた張り紙 (写真 8) もあった。口径 20cm であることから、20cm トロートン・シムス屈折望遠鏡、あるいは 20cm ブラッシャー天体写真儀で使われたものと思われる。奇妙なことに、この木箱の蓋には、岡山天体物理観測所宛ての張り紙 (写真 5) がある。写真 1 からわかるように、この木箱の蓋は、箱本体より板が新しいものようである。1960 年以降、新しく出来た岡山天体物理観測所でこの対物プリズムを有効利用しようとしたのかも知れない。しかし、岡山には口径 20cm の望遠鏡は無い。岡山天体物理観測所が創設され、最初に赴任した清水実氏 (故人) は三鷹の光学素子をたくさん岡山に持ち込んだことが知られているから、その一つだ

ったかもしれない。しかし、岡山に持ち込まれた物が三鷹に返って来ることはほとんどなかったが、この木箱には写真 6 の張り紙もあったようだから一度、岡山に運ばれたが、三鷹に帰ってきたようだ。



写真 5 岡山宛の張り紙

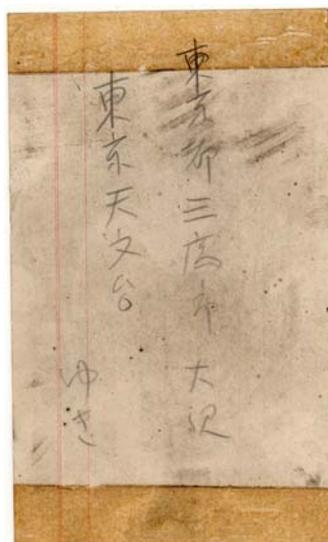


写真 6 三鷹宛の張り紙

木箱の本体には「飯倉天文臺」と墨書きされている(写真 7)。また張り紙で「No. 3」と書かれている(写真 8)。



写真 7 木箱の「飯倉天文臺」の文字

このことから、この対物プリズムは、東京天文台がまだ麻布飯倉の地にあった 1924 年以前のものと思われる。対物プリズムの蓋にされていた白い厚紙のメモ書きが写真 9 である。



写真 8 No. 3 の張り紙

写真9が、このプリズムの上におかれた白い厚紙の蓋である。これには何やらこのプリズムについての情報が書かれているようだが、判然としない。



写真9 メモの書かれた厚紙の蓋

写真10がメモの部分の拡大図である。残念ながらこの対物プリズムには名盤、刻印の様なものは見当たらない。しかし、歴史的な貴重なものであることは間違いない。

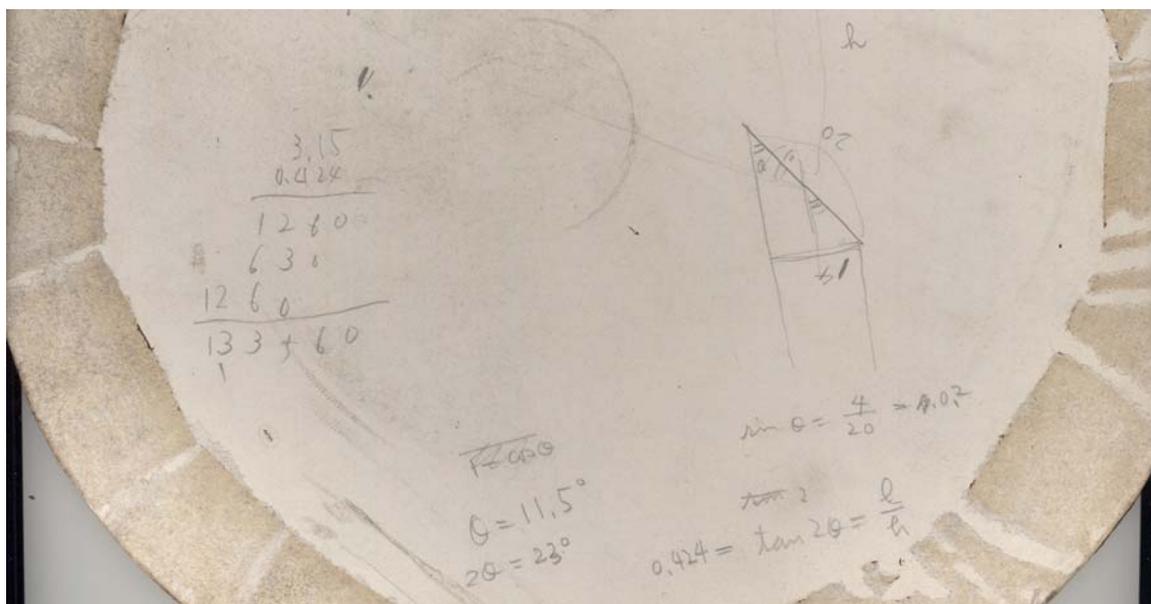


写真10 口径20cmの対物プリズムの蓋に書かれたメモ